

## 【明治期から現在までの若松城の状況と本事業に至る背景】

1384年に葦名直盛が黒川城（現 若松城）を造営以来、伊達家・蒲生家・上杉家・加藤家・保科家・松平家に亘る長い年月を経て、天守閣をはじめとする堀や石垣の増改築と共に現在の会津若松市の根幹ともいべきまちづくりがお城を中心に行われてきました。

しかし、1868年には戊辰戦争によって若松城は無残にも姿を変え、1873年（明治6年）の「廃城令」を受け、ついに1874年（明治7年）には石垣や立樹等を除き、天守閣をはじめとする建造物は解体されてしまいました。

1917年（大正6年）には東京帝国大学農科大学の本多静六教授によって「若松公園設計方針」が示され、城跡の近代公園化の方針が計画されました。

これによって二ノ丸や西出丸の一部の石垣等が撤去されることとなりましたが、1930年に城跡の緊急保存を目的として福島県によって若松城は国の史跡に仮指定され、1934年（昭和9年）12月28日に文部省告示第312号の本指定に至りました。

さて、全国のお城を見ると1873年の「廃城令」以降、お城は解体と近代公園化が進み、ソメイヨシノを主とする桜や松、杉などの植樹が盛んに行われました。若松城においても同様で、明治期に植えられた桜の植樹によって、現在では日本有数の桜の名所として観光客を集めています。しかし、弘前城にある樹齢100年を超えるソメイヨシノがあるものの、一般的に、この木の寿命は60年程度と言われており、若松城においても古木の腐食や病気などにより、枯れ始めているのが現状です。

また、ソメイヨシノをはじめとする松や杉、外来種などの樹木の根が石垣を押し退けて「孕み」を生じていることは若松城が抱える問題の一つに挙げられています。平成8年の会津若松市が行った大規模調査により100か所を超える石垣の「孕み」が確認されており、鶴ヶ城公園整備計画によってその管理が策定されたにも拘らず、20年間抜本的な問題解決が行われないうまま、400年以上前から現存する石垣は今まさに崩れようとしています。

2018年に会津若松市では「戊辰150年」を記念して先人に感謝する方針を打ち出し、当会議所では第1回目の石垣保全活動を実施し、本年度で3回目の事業となります。市民が主体となって私たちのシンボル若松城の石垣を守る必要があるのです。